

タワーマンションの最上階、モデルルームでしか見たことないような整いすぎた室内。眼下に散らばった夜景が遠くに見える。

私は朝倉里麻（あさくらりま）、二十五歳の普通のOLだ。平凡な自分とは一生縁がないはずの場所。なのに私は、今夜もここにいる。

この家の家主は、花邑昴（はなむらすぼる）。今、最も勢いのある新進気鋭の画家で、個展のチケットは発売と同時に完売、作品は一枚で私の年収を軽く超えてしまうほどだ。

私と彼は、——いわゆるセフレだ。

ある日訪れた彼の個展で声をかけられて、その日の夜には流されるように身体を重ねていた。そもそも私は、元々彼の作品が好きだった。そんな人に誘われたら、断れない。しばらく彼氏もいなかったし、お互いフリーならこういう関係に耽る時期があってもいいだろう、と半ば自分を強引に納得させて、もう

三ヶ月になる。

だから、今日みたいに夜中に突然呼び出されて情事に耽ることも、しよつちゆうだった。

「……ん♡ あ、そこ……っ、や、あ……っ♡」

2

「そこがいいの？ 里麻……、じゃあもつと触れないとね」

形のよい薄い唇が、柔らかく弧を描いた。長い指が秘部に沈んで、私の弱いところを的確に抉っていく。

覆い被さられて、肩までつくくらい長さの彼の髪が、ふわふわと私の身体を撫でる。鼻筋の通った端正な顔立ちが、私の眼前まで迫った。ヘーゼル色の瞳に真っ直ぐ見つめられて、思わず視線を逸らす。

(…………う、かつこいい)

美術界の寵児として持て囃され、しかも身長も高くて顔が良いだなんて、神様は彼に色々と与えすぎだ。

「…………あ、子宮降りてきてるよ。ポルチオ、トン♡ トン♡ つてされるの気持ちいいね…………♡」

「…………あ♡ んあ…………っ、それ…………っ♡ すばるさ…………っ、んん…………っ、ふかいい…………♡」

「…………こら、昴って呼んでっつて言ったでしよう？ ほら、言っつて」

「…………ああっ、それえ…………♡ やだあ…………っ、すばる…………っ、すばるう…………♡」

昴さん——昴の長い指がリズムカルに、子宮の入り口をトン♡ トン♡ と優しく叩く。すでに蕩かされた身体は、その刺激をどろりとした重い快樂へと変えていく。

(うう……♡ またきちやう……、またおっきいのきちやう……♡)

「あー……、イきたがってる顔してる。こんなに顔真っ赤にして……。おまんこ、ぎゅう♡ ぎゅう♡ って締まって、僕の指飲み込もうとしてるみたい」

「んあ……♡ すばるう……♡、おく……♡、おくう♡」

「奥気持ちいいね……♡ そしたらこっちも気持ちよくなつてイこうか」

「あ♡ ひあ……♡♡」

勃起して皮から顔を出した敏感なクリトリスを、愛液でぬるぬる♡ と滑らせるように親指の腹ですり♡ すり♡ と擦られる。ナカと外の刺激が同時に私の身体を責め立てて、私はあっけなく限界を迎える。

「あ……♡ つ♡ おあ……♡、イク、イクう……♡♡ んう♡、いつちやうう……♡♡」

ビクッ♡♡♡ ビクビクビクッ♡♡

脳の芯がふわっと緩んで、それから一気に全身が痙攣した。睦がぎゅう♡
ぎゅう♡ に締まって、大量の蜜を溢れさせながら昴の指を締め付ける。

「あ……♡ んう……、は……♡」

「……里麻、最近すごく感じやすくなってきたよね。気持ちいい？」

こめかみに口付けが降ってきて、耳元で甘く掠れた声が響く。

「んう……♡ き、きもちいい……♡」

すでに数回達してしまつてふわふわとした頭には、理性なんてなくなつていた。真正面からえつちを気持ちいいというなんて恥ずかしいはずなのに、私の口からはそんな素直な感想が飛び出してしまふ。

「……じゃあ、もっと気持ちよくなろうか♡ 里麻はこっちも気に入ってくれてるよね」

昴の目線の先を追う。しっかりと割れた腹筋の下には、中性的で綺麗な顔に

は不釣り合いの、赤黒くビキビキ♡ とそり返った剛直があつた。

彼がその大きな手で準備運動をするように男根を抜くと、彼の欲望を示すように、鈴口から透明な液体がとろ……♡ と、こぼれ落ちた。

(な、何度見ても……、おつきい……♡)

6
こんなにグロテスクなものがおまんこに挿入って、なおかつ気持ちよくしてくれるなんて、いまだに信じられない。でも、彼の言葉を借りれば、私は間違はなく、彼のおちんちんを気に入っている。そう、えっちの相性がいいからこそ、さらに困る。

「その潤んだ瞳、たまらないな。僕のちんぽが欲しいって、顔に書いてある」

「……そ、そんなこと♡」

追及から逃れるように、私は視線を逸らして俯いた。彼はそんな私の顎を掬い取って、目線を合わせる。

「ほら、欲しいんでしょ？ なら、ちゃんと見ていて。君の潤みきったおまんこが、僕のモノを受け入れるところ」

「うう……♡」

（は、恥ずかしいのに……っ♡ 目、逸らせない……♡）

ぴとお……♡ と膨れあがった亀頭が、膣口に当てがわれた。亀頭が潤んだ蜜穴に飲み込まれて、だんだんと見えなくなっていく。亀頭がぐぶう……♡ と膣に沈むと、太いカリがみち……っ♡ みち……っ♡ と膣襞をかき分けていく感触が、やけに鮮明に感じられた。

「里麻のおまんこ、ぎゅうぎゅう♡ に締まつてるね……♡ 何度もたくさんハマてるのに……、毎回初めてみたいにすごいキツくて……。でもこうやって少しずつ挿れていくと、ナカが奥まで欲しがって吸い込もうとするんだ……♡」

「……ん、あ……♡ あ……、は、あ……♡ んん……♡」

昴は膣襷を一つ一つこそぐのように、腰を落としていく。私の方が焦ったくなつて、無意識のうちに腰をへこへこ♡と揺らしてしまう。

彼はそんな私の様子を見て、その涼やかな目を細めた。

「……ふふ。ほら、もう半分以上きたよ。もう少しで里麻の大好きなポルチオまで届くからね」

(はやく……っ、はやくおくまで……っ♡)

ぬふ……っ♡ ぬふ……っ♡ ぬふぬふ……っ♡

——こりい……♡♡

「お……っ♡♡」

亀頭の先端が子宮口にぶつかつて、こりこりとしたソコを押し潰した瞬間、私は思いつきり背筋をのけぞらせた。快感が脳天を突きつけて、身体がビクビク♡と震えた。

(イッてるぅ……っ♡ おちんちん挿入っただけで、イっちやつてる……っ♡)

「あ……っ♡ あ、あ……っ、うゝ……っ♡」

「奥にこっん♡ ってちんぽ当てただけでイっちやつた？ 敏感な身体で可愛いね。ここ、さっき指でしたみたいに、ゆっくりトン♡ トン♡ するからね……♡」

絶頂の余韻で小刻みに震える下腹部に、鼻の長い指がそつと触れる。そのま
ま外側からポルチオをトンッ♡ と軽く押されると、身体が次にくる快感を勝
手に期待して、ナカがきゅう♡ と締まった。

(ああ……♡ また奥のところ、たくさんこちゅこちゅ♡ ってして気持ちよ
くさせられちゃうんだ……♡)

……ずんっ♡ ずんずんっ♡ ずぼ……っ♡

「あ、ああ……っ♡」

熱い塊が、膣壁をじりじりと擦り上げながら動き始める。結合部からは、私の蜜がじゅわ♡　じゅわ♡　ととめどなく溢れ出して、ぐちゅぐちゅ♡　と卑猥な音を立てる。

「……ん♡　あゝ……っ、きもちいい……っ♡　あぁっ、んあ……っ♡」

ここまで焦らされていたこともあって、ようやく求めていた刺激を与えられた身体が内側から熱くなつて悦ぶ。

ずぼずぼ……っ♡　ずんずん……っ♡

(これ……っ、おもいい……♡　ずんっ♡　ってあたまの奥までひびくみた
い……っ♡)

私の弱点を知り尽くした、無駄のない腰使い。一点に凝縮された衝撃が、分散されることなくダイレクトに最奥を穿つ。

逃げ場のない快樂に身を任せるようにぎゅうつと目を閉じた。

「里麻、ほら目を閉じないで。ちゃんと僕の目を見て感じて」

「あ♡ん、うう……♡」

(やだあ……♡ みたくないよお……♡)

だって、目を開けていたら、誰に抱かれているのか思い知らされてしまう。私にこんな深い快樂を与えるのが、この目の前の美しい人なんだって。

普段は涼やかなヘーゼル色の瞳が、今は興奮でどろりと濁っている。その瞳に、顔をぐちゃぐちゃにして、快感を貪る自分のあられもない姿が映り込んでいるのがわかって、こぼれそうな声を堪えるように、ぎゅうつと唇を噛み締めた。

形の良い薄い唇がゆつくりと近づいて、引き結んだ私の唇を、ぺろり♡ と舐めた。それでも口を開けない私を誘い出すように、おまんこの奥を剛直でぐ

「……は、ちゅ……っ♡ またおまんこぎゅう♡ って締まった。お口もおまんこも気持ちいいね……♡ 僕も、よすぎて……。そろそろかも……♡」

「あ、んん……っ♡ ……は、あ……っ♡ んう……、んむ……っ♡ あ、あ♡」

彼の熱い吐息に膣圧がさらに高まって、彼の剛直を締め上げてしまう。すると、おちんちんが私の締まりに抗うように、さらに熱く、一回り大きくずくん……っ♡ と膨れ上がるのをはつきりと感じた。

ずちゅずちゅずちゅっ♡ パンパンパンっ♡

「ああ……っ♡ んんっ、ん……っ、……はっ、あ、あ♡ ん……っ、ああっ♡」

「あー……、また締まってる……♡ ……は、あっ♡ ……出すね」

「……んんっ!?♡ あ、ああっ♡♡」

ぎゅう♡ と強く抱きしめられて、剛直が身勝手な男の力で、蕩けきつた私のおまんこを穿ち続けた。彼に解されたポルチオはその強い刺激ですら全て貪欲に飲み込んで、熱い快樂へと変えてしまう。痺れるような刺激が脳の奥深くまで伝わって、私は瞬間に絶頂へと上り詰めていく。

ずちゅずちゅずちゅ♡ ぐぼぐぼぐぼ♡♡

ごちゅごちゅ♡♡ ごちゅごちゅ♡♡

「あ♡ それやだ、やだあ……♡♡ つよいい……♡♡」

激しい抽送で掻き出された愛液が、結合部でじゅぶじゅぶ♡ と真っ白く泡立った。身動きも取れないまま、あまりの快樂に背中を仰げ反らせて、足の先までピン♡ と伸びていく。

「あ……♡、ああ♡♡ すば、るう……♡♡ イク、イっちゃうう……♡♡
ああ……♡、イク、イクイク……♡♡♡」

——どちゅん♡♡

ガクツ♡ ビクビクビクツ♡♡

「く、里麻……っ、出すよ……っ」

びゅるるるっ♡ びゅっ♡ びゅっ♡

「ああ……っ♡ あ、あ……っ♡」

昴が勢いよく剛直を引き抜いたのと同時に、熱い精が放たれた。痙攣するお腹の上に、どろり♡ と熱い白濁が激しく飛び散る。その熱さに身体がビクツと震えて、ぽっかりと空いたおまんこがひくっ♡ と戦慄いた。

(いっぴいかかっている……っ♡ あ、あっついよお……♡♡)

「……は、あ……。あ、胸の方までかかっちゃった。……いやらしいね」

「ちよ……っ♡ あ……っ♡」

白濁を塗りたくるように、乳輪周りをくるくると撫でられて、思わず甘い吐

息が漏れる。ヘーゼル色の瞳が、満足そうに細められた。

それから昴は身体を起こして、そつと私の額に口付けを落とした。そのまま、私に笑いかける。

「里麻、今日マネージャーから美味しそうなぶどうをもらったんだ、一緒に食べよう」

(……やだ、そんな顔で見ないでよ)

まるで、大切な人に向けるような笑顔。こんな顔をされると、勘違いしてしまいそうになる。だけど、これがきつと昴という人なのだ。屈託なくて、無自覚に優しい。だからセフレ相手にも、こうして――。

散々いかされて汗もかいて、喉はからっからだった。そんな笑顔で言われてしまつては、断りきれない。

「……うん、食べる」

きつと、身体を重ねた後だから、こんな風に思ってしまうのだ。

私たちはセフレ。身体だけの関係だ。

【昴視点】

17

長いまつ毛が伏せられて、頬に影を作る。細くて長い指が、紫色の小さな球体をそつと摘んだ。ぽつてりと艶のある小さな唇がゆっくり開いて、ぶどうが彼女の口の中に消えていく。口の中で舌の上を転がされているのだろう、ほんの少し頬が膨らんだ。やがてそれは小さな歯で咀嚼されて、白い喉がかすかに動いた。

ごくり、と鳴った喉の音だけが、静かな部屋によく響いた。

なんてことはない、食べ物をお口に入れるだけの動き。それだけのことに、

さつき精を吐き出したばかりの下半身が再び熱を持つのがわかった。裸のままのソコが、じわりと疼く。

静かな空気に耐えかねたのか、僕にずっと見られているのが恥ずかしいのか。彼女はこちらをチラチラと伺いながら、長い黒髪を何度も耳にかけている。その指の動きや、まだ赤く火照ったままの耳ですら、僕の情欲を煽るのに十分すぎた。髪をかき上げるたびに、白いうなじがちらりと覗く。

（ああ、その首筋に口付けたい）

そんな欲望に突き動かされるまま、ベッドに座る彼女の背後からそつと腕を回した。細い首筋に顔を埋めて、大きく息を吸う。ほんの少しの汗の香りと、髪に溶け込んだ花の蜜のような匂いが肺の奥まで満ちていく。それだけで、理性より先に身体が動いていた。

「ねえ、里麻」

「な、なに……？ ……っ!?♡」

彼女の耳元で囁きながら、すっかり大きくなってしまったソコを、彼女の尾てい骨あたりに押し付ける。びくつと身体を震わせた彼女が、顔を真っ赤にして俯いた。

(……可愛い)

花の蜜のような香りに、出会った日のことを思い出す。

——そう、僕は物心ついた時から、息を吸うようにずっと絵を描き続けていた。

だけど、決まって評価されるのは、僕が描きたかった絵ではなく、世間ではこういうのがウケるんだらうなと思って描いた絵ばかりだった。

時代の寵児だなんだと持て囃されても、それは僕が作りたかったものではない。

い。そんな板挟みに苦しんでいたときだった。

何度目かの個展。誰も足を止めなかった絵の前に、ただ一人立っていた女性
がいた。花の蜜の香りを纏わせた彼女だけが、世界中でただ一人、僕の見
てほしかつた絵を見ていた。それだけで、恋に落ちるには十分だった。

気がついたら、彼女を抱いていた。けれど、何度抱いても、満足することは
なかった。まるで、同じ景色を描こうとしても、光や天気、切り取り方
で、一つとして同じ絵が生まれないように。

彼女を抱いた後は決まってインスピレーションが湧いてきて、僕は寢食も忘
れて絵を描くことに没頭した。

(……僕には、彼女が必要だ)

こんな誰かを夢中になつて愛したのは、生まれて初めてのことだった。

「……ね、ねえ、昴……」

そんなことを考えていたら、遠慮がちな里麻の声が聞こえた。

（ああ、ずっとちんぽ押し付けてたのか。なんか気持ちよくて、ずっとやっちゃってたな）

里麻の背中は、精子の残滓と新しく溢れ出た先走りとで汚れてしまっていた。

「……ん、どうしたの、里麻」

恥ずかしがる彼女が可愛らしくて、わざとわからないフリをして意地悪してしまう。その間にも、欲望に猛った男根を彼女の背中に擦り付け続ける。敏感なカリの境目のところが彼女のきめ細やかな肌に擦れて、これはこれで結構気持ちがいい。

「その……っ！ それ……、恥ずかしい」

「……それって、どれ？」

「う……、そ、その……。お、おちんちん……」

最後は消え入りそうな声だった。品のある彼女の声から発せられた男性器の名前に、男根がさらにぐぐ……っ♡ と硬くなる。

「……このちんぽで、さっきまで里麻のおまんこ、ぐぼぐぼ♡ って奥まで掻き回されてたのに？」

さらに追い詰めるように卑猥なことをわざわざ言いつて聞かせると、彼女は思った通り首筋まで真っ赤にさせた。

「そ、それとこれとは違って……」

「……里麻の身体でオナニーしてるんだよ。ほら、君のすべすべの背中に僕のちんぽから出た白いのがねっとり纏わりついて……、すごく煽情的だ」

(……あ、何か浮かんできそう)

彼女に触れていると、感覚が研ぎ澄まされる。乾いていたはずの井戸に、なみなみと水が満ちていくような、そんな感覚だった。

「……っ、そんなこと言わなくていいから!!」

「恥ずかしがる君が可愛くて。……だけど、里麻も興奮してるよね?」

彼女の下腹部に手を回して、割れ目に指を這わせると、先ほど拭ったはずの秘部はぐっしよりと濡れていて、にちゅり♡ といやらしい水音が響いた。

「あ……♡」

「……僕のせいで、またおまんこ、ぐちゃぐちゃになっちゃったね。この欲しがりなおまんこ、もう一回ぐっぽり♡ 埋めてあげないと……♡」

「……んっ♡ や、あ……っ♡ ちよつと待って、鼻……!」

「……ごめん、待てない。もう一回抱かせて」

彼女の細い腰を掴んで、ベッドに押し付ける。その柔らかな唇を奪うと、甘

いぶどうの味が僕の口の中に広がった。

(ああ、たまらないな)

その甘い果実を、もう一回夢中になって食った。



陽の光が眩しい。ゆつくりと、意識が浮上する。

(ん……、もう朝……?)

ふわふわの大きいベッドの上で、私は一人横になっていた。いつの間にか、柔らかな手触りのバスローブを着せられている。

(……昴が、着せてくれたのかな)

けれど、隣に昴の姿はなかった。

私がこの部屋で目を覚ますとき、昴はいないことがほとんどだった。きつと今頃はアトリエか、それとも取材の現場か。雑誌のインタビューで、彼は睡眠より制作を優先するタイプだと語っていた。売れっ子の彼は、常に忙しい。

胸の奥に一抹の寂しさがよぎった気がするけれど、私はあえてそれに気づかないフリをする。私たちはセフレだから、このくらい淡白なのがちょうどいい。

私はゆつくりと起き上がり、大きく伸びをする。壁一面の窓いっぱい、雲ひとつない青空が広がっていた。眼下には、まだ朝の静けさの残る街並みが小さく見えた。

(……あ。そういえば、シャンプー切らしてたんだった。買って帰ろつと)

「シャワーだけ借りてから出よう」

昴はこの家は好きに使ってくれていいと言ってくれていたの、お言葉に甘えてシャワーだけは毎回借りている。

私は一人、シャワーを浴びて、念の為持つてきた着替えを身に纏って、大きなタワーマンションを後にした。

無事にシャンプーを買って、街中を当てもなく歩いていた。

信号待ちをしていると、街頭モニターに昨晚まで抱き合っていた人の姿が映る。

(……あ、昴だ)

『続いては新進気鋭の画家、花邑昴さんです！ 近頃は個展のチケットも争奪戦で瞬殺だそうじゃないですか！ 先日の作品も八桁を超えたとか！』

『おかげさまで。ありがとうございます』

隣の大学生っぽい女の子たちが、街頭モニターを見上げながら、黄色い声をあ

げた。

「きゃく！ 花邑昂じゃん！ インスタの投稿見た？ 制作中の写真あげてたやつ！ あんなに顔よくて絵も描けるとか、存在がずるくない!!」

「ほんとそれく！ なんか最近の作品めっちゃ話題だよ。前はそんなでもなかったのに、急に胸に刺さるっていうか……私、絵とかわかんないけど、めっちゃすごく!! つてなった!」

27
（……絵の楽しみ方は、人それぞれだもんね。でも、そう。昂はすごい人なんだ）

こうして画面越しに見ると、雲の上の人だなあとと思う。私だって、ちよつと前まではあの子たちと大差なかった。ただ、私は顔よりも作品の方が好きだったけれど。

それが今は、セフレだ。彼の気まぐれに抱かれるだけの、存在。

(……なんでこんなに寂しいんだろう)

ぼーっとしていたら、信号が青になったことに気が付かなかったようだ。前を歩いてきた人につかつかつてしまった。顔を上げると、若いカップルだった。

「……あ、すみません……!」

「いえ、私こそごめんなさい……!」

「全くお前は……、ちゃんと前見て歩けつて言っただろ」

男性が、自然な仕草で彼女の肩を抱き寄せた。そのまま彼女の手を取って、指を絡め直す。彼女は男性を見上げて、蕩けるような笑顔を向けた。それから二人はぴたりと寄り添って、すぐに人混みの中に消えていった。

(……あ)

——想像、してしまった。

もし私が、彼と恋人だったら、と。肩を並べて、指を絡め合つて街中を歩く姿

を。他愛もない話をしながら、甘いドリンクを二人で分け合って、歩く姿。

(……これはだめかもしれない)

ずっと心の奥底に蓋をしていたもの。彼に面倒な女だと思われなくなかった。好意を知られて、この甘くて都合のいい関係が終わってしまうのを無意識に恐れていた。

——でも、愛されたい、と思つてしまった。

あの、ヘーゼル色の瞳に私だけを映して欲しい、と。

(……ただのセフレ、だったはずなのに)

最初は、遠い雲に触れられただけで、満足だった。昂があんな風に私を抱くから、勘違いしてしまいそうになっただけだ。あんなに見た目も良くて素晴らしい画家の隣に立つのは、私みたいな冴えない普通のOLじゃなくて、もつとふさわしい人がいるはずだ。

望むのですら、烏澁がましい。でも、このまま昴と一緒に過ごしていたら、きつと私は望んでしまう。彼と深い関係になることを。

そうなる前に、どうにかしなきゃいけない。

(……とりあえず、もう今日は帰ろう)

行きよりも重たくなった足を引き摺るように、帰路についた。



それから二週間後の休日、私は鏡の前で化粧の最後の仕上げをしていた。

「よし、こんな感じでいい、かな」

この二週間、昴からの連絡はなかった。率直に、寂しい、と思ってしまう私があった。そう思ってしまうということは、やっぱり私は昴に惹かれてしまっている

のだ。

（このまま昴に迷惑をかけるわけにはいかないよね。……身の丈に合った、普通の恋愛をしなくちゃ）

だから今日、私は一步踏み出してみることにした。

そう、このあと、会社の同僚の男性とご飯に行くことになっているのだ。何か食事に誘われてはいたけれど、気を持たせるのも悪くて、今までその誘いを受けたことはなかった。

（いい人、ではあるんだよね……。会社でも気が利くし、優しいし……）

だから今回、彼に再び食事に誘われたとき、まずは昴以外の男性を知るところから始めてみようと思つて、行くことに決めた。

「よし……、そろそろ出ようかな」

身支度が終わって立ち上がったとき、ブルルツと、かばんの中でスマホが

鳴った。

(……………？ 今日のご飯のことかな)

スマホを取り出して、通知を確認する。そこに表示された名前を見て、ドキリ、と心臓が跳ねた。

『昴…今日来れる?』

(……………このタイミング、かあ)

いつもの連絡といえは、いつもの連絡。いつもの私だったら、ときめく心に気づかないふりをして、昴の家に向かっていた。

(……………昴のところに、行きたい)

そう思ってしまった、慌てて首を振る。

(それに……………、今日のご飯に行く約束しちゃったし……………)

「今日は用事があるので行けません、……………」

迷いを振り切るように、私は勢いよく家から飛び出した。

——飛び出したはず、だった。

けれど、マンションのエントランスを抜けると、この場所には不釣り合いな高級スポーツカーがあつた。

この車に乗つてゐる知り合いなんて、一人しか心当たりがない。

(どうして、昴が……)

頭が真っ白になる。どうして、彼が今ここにゐるんだろう。

運転席のドアが開く。そこから見えたのは、見慣れたブラウンの長髪。彼は車を降りると、呆然と立ち尽くす私の前に立った。口元に笑みを湛えた、いつもの涼やかな彼が、そこにいた。

「昴……」

「里麻、返事見たよ。用事なんて珍しいね。どこか行くなら僕が送ろうか？」

いつものようにおっとりしたペースで昴は言った。

（あれ、私、ちゃんと断った、よね……？）

「う、ううん。電車で行くから、大丈夫だよ」

「そっか。今日は里麻と食事に行こうかなって思ったんだ。最近僕の家に来てもらってばかりだったでしょう？」

（……どうして、今日に限って）

いつもは私から会いに行かないと会えないのに。迎えに来てくれて、食事に行くなんて、まるで――。

「そうだったんだ……。誘ってくれたのにごめんね。でも私、今日は食事に行く約束があつて……」

(……話しすぎたかも)

そこまで話す必要はなかったはずだ。だけど、口から出てしまった言葉は、取り消せない。昴の目が、すうつと細められた。

「……っ」

思わず息を呑んだ。

昴が顎に手を当てながら、私の身体を上から下までゆつくりと視線を滑らせる。私はその視線に縫い止められたように動けなかった。

「そのオフホワイトのスカート、下ろしたて？ 初めて見るな。君の黒髪によく映える。ほら、俯いてないで、よく見せて……？」

「あ……っ」

昴の長い指が、私の顎を捕らえた。決して強くはない力なのに、私は逆らえずに顔を上げた。

上目遣いで見上げると、ヘーゼル色の瞳底の見えない光を湛えていた。

「……もしかして、男？」

「うん、そうだ、……よ」

その低い声に責められているようで、視線を逸らした。

「……そう」

一段と低い昴の声が、静かなエントランスに落ちた。

「それなら、悪いけど行かせるわけにはいかないかな」

「ぎゃ……！　ちよ、待つて……っ」

昴が私の手首を掴んだ。いつもの穏やかな手つきからは想像もできないほどの力で、ぐいっと腕を引かれる。

声を上げる間もなく、流れるように助手席に詰め込まれた。

（ど、どういうこと!?　どこに連れて行かれるの……っ）

突然の出来事に、頭が真っ白になる。何か言わなきゃ、と思うのに、言葉が出てこなかった。

私が固まっている間に、昴は運転席に乗り込んだ。昴の身体が助手席側を通り過ぎた瞬間、彼のシャンプーの香りに混じる、いつもの絵の匂いが鼻を掠めた。私は反射的に、身体をびくりと強張らせる。

「……っ」

けれど昴は私の身体を通り過ぎて、シートベルトをそつと引つ張った。

「……何もしないよ、ここではね」

(……ここでは、つて)

何もわからない私を乗せて、スポーツカーは低いエンジン音を響かせて夜の街へと走り出した。

鼻の大きい手が、私の右手を握っている。

けれど、お互いに何も言葉を発しないまま、車は人気のないところを走り続けた。

(どうしてこんなことになってるんだろう……)

同僚とただ食事に行こうとしていただけだ。私たちの関係を考えれば、何も悪いことはしていないはず。それを鼻に咎められる理由だってないはずなのに。

そんなことをぐるぐると考えていると、車は海沿いの公園に停まった。ぱつと顔を上げてあたりを見回すと、車の時計が目に入った。

(……あ！ 約束の時間、過ぎてる！ 連絡だけでもさせてもらわなきゃ……)

「あの、鼻……！」

言いかけた時、ブルルツと私のスマホが震えた。

「……………出てもいいよ、今日約束してた男からでしょ？」

「……………う、うん」

そうは言いながら、昴は繋いだ右手を離す気はないらしい。私は仕方なく、片手でハンドバッグからスマホを取り出した。

（……………時間過ぎたこと、怒ってるかな）

「……………も、もしもし」

『……………あ、朝倉さん！ 大丈夫!? よかったら、電話出てくれて。メッセージしても返信ないし、心配したよ……………!』

人の良さそうな声が、スマホ越しに聞こえてきた。誠実で、穏やかで、私のことを本当に心配してくれているのが伝わった。こんなに真っ直ぐな人を、こんな形で待たせてしまっている。

(……ごめんなさい)

謝らなきゃ、と思った。こんな優しい人を、私の都合で振り回してしまっていることを。それなのに――。

昴は私の右手をぎゅうつと強く握りしめた。思わず顔をあげると、ヘーゼル色の真っ直ぐな瞳と視線がぶつかる。私は昴の視線から逃げるように顔を逸らした。

(ま、まずは、電話……!)

「えつと、その……」

何を話せばいいのかまとまらないまま口を開いた時、右手が持ち上げられた。何をするんだろうと再び顔を上げると、底の見えない瞳をした彼と目が合った。そのまま私の目を見つめながら、親指の腹で、私の手の甲をすりすり、とゆつくり円を描くようにこする。

「……………」

(急に何するの……?! ……昴、やめてよ)

『あ、急に電話なんてごめん！ 朝倉さんに何かあったのかなって、俺心配で……』

電話口から焦った声が聞こえる。彼は、何一つ悪くないのに。

「う、ううん。ないの、なにも。……っ」

昴の柔らかな唇が、私の手に触れた。熱い息がかかって、音もなくキスが落とされる。私の指を、一本一本確かめるように。指先に彼の唇が触れると、ぞわぞわ……♡ と背中が栗立った。

(どうして……、そんな目でキスするの……? そんなのまるで……)

——嫉妬、しているみたい。

そう思った瞬間、心臓がどくり、と跳ねた。昴が、私のことで、嫉妬。

(……そんなこと、あるはずない)

だってセフレだから。身体だけの関係だから。だから、これはきつと——。

だけど、昴の視線はずつと熱っぽく私を捕らえていた。

(あ……っ、電話！　ちゃんと謝らなきゃ……！)

「あ、あの……！！　本当にごめんなさ……っ」

っくく……♡

「……っ!?♡」

(……昴!?　何してるの……!?)

湿った舌の感触に、びくりと身体が跳ねた。柔らかい舌先が、そつと指の間をなぞるように私の手を這う。

れろ……っ♡　れろくく……っ♡

『大丈夫？　やっぱり具合が悪いんじゃない？』

「そ、そんなこと……、あっ♡」

思わず声が漏れてしまつて、慌てて唇を引き結んだ。

(だ、だめ……！ それはさすがに……っ♡)

昴は空いている方の手を、私の服の下に差し入れた。そのまま這い上がってきた手が、服を捲り上げながら、ブラジャーのカップ越しに膨らみをやわやわ♡ と揉みしだく。

「……っ♡」

触れられた瞬間、そこから全身にじわりと熱が広がった。必死に唇を噛んで、声を抑える。止めなきや、と思うのに、なぜか身体が言うことを聞かなかった。

私が止めないのをいいことに、昴の手の動きはだんだんと遠慮のないものになっていく。大きな手で下から支えるように乳房全体をもにゅもにゅ♡ と揉

んだかと思うと、人差し指でブラジャー越しに乳首をカリッ♡ と引つ搔かれて、ビクリ♡ と腰が震えた。

『……朝倉さん？』

突然何も言わなくなってしまう私に、電話の向こうから心配するような声が聞こえた。

「……んっ♡ だ、大丈夫……♡」

ようやく絞り出したそれは、自分で思ったよりも甘く鼻に抜けるような声だった。

(全く大丈夫じゃなさすぎる……!♡ 昂、もうやめて……♡)

右手を這う舌の感触と、乳首をカリカリ♡ される感触に、頭がじいんと痺れていく。

必死に唇を引き結びながら、首を横に振って訴えた。これ以上声が漏れた

ら、電話口に聞こえてしまう。

昂はそんな私を見て、薄い笑みを浮かべると、ブラジャーのカップを下げてしまった。ぶるんっ♡ と乳房が溢れ出る。私の乳首は、こんな状況なのにぷっくり♡ と膨れあがつて上を向いてしまっていた。

（身体が……♡ 勝手に期待しちゃってる……♡ 勃起乳首、カリカリしてほしいって、おっぱいが媚びちゃってる……♡ つ♡ やだ、やだあ……♡）

——カリ……♡ ツ♡

「……んっ♡♡」

言い逃れできないような甘い声が漏れて、身体が大きくビクン♡ と跳ねた。求めていた刺激を与えられて、お腹の奥が悦ぶように、蜜がじゅわ♡ じゅわ♡ と溢れ出すのがわかった。

（声抑えないと……！）

『……大丈夫？ やっぱり具合が悪いんじゃない……』

(……声、聞こえちゃってる……っ♡ これ以上我慢できない……♡ は、早く電話、終わらせないと……っ♡)

「だ……っ、だいじょうぶ……っ、だから、あっ♡」

なんとか甘い声が漏れないように、必死に押し込めようとする。だけど、私と話している間にも、カリカリ♡ カリカリ♡ とリズムカルに乳首を引っ掻かれて、もう電話どころではなかった。

(うう……っ♡ それ、好きなやつ……っ♡ いつもイカされてるやつ……っ、ここでしたら、ダメえ……っ♡)

電話をしていることも一瞬忘れ、鼻に慣らされきった身体が、いつものように絶頂へ向かおうと準備を始める。内腿がガクガク♡ と小刻みに震え始めた。

(イク、いつちやう……っ♡ くる、くるう……♡)

絶頂の予感に身をすくませたその時。ピタリ、と、突然昴の動きが止まる。

そのまま、彼は真つ赤に勃起しきった乳首から手を離してしまった。

「……あ♡」

(イ、イかせてくれない……♡ おっぱいジンジン♡ するう……♡)

思わず、縋るような目で彼を見ると、優しい笑みとともに手の甲に触れるだけのキスが落とされた。

(もう、昴が何を考えてるのかわかんない……っ♡)

身体が、熱い。お預けされた私の身体は芯まで火照って、もう彼のことしか考えられなかった。

けれどその時、耳元から大きく息を吸い込んだ音が聞こえて、私は現実に戻された。

『あ、あの！ 俺、実は……。その、俺、朝倉さんのこと好きで……。!! あつ、えつと、だから……。俺は、いつでも待つてるから……。』

「……………え、あ……………」

電話はそのまま切れてしまった。結局ちゃんと謝れなかったことが、誠実な彼に対して申し訳ない。

「……………好き、だつて」

「……………つ、あ……………♡」

鼻の低く掠れた声で紡がれたその二文字が、甘く耳朶を打った。お腹の奥がぎゅうっ♡ と疼いて、同僚が勇気を出して言ってくれたはずの言葉は、完全にかき消されてしまった。

「どんな男か知らないけど、里麻を好きだなんてその男、見る目があるね。……………だけど、そいつは知らないでしょ？」

「あ……っ♡」

昴の大きな手が、スカートの上から私の下腹部を覆うように触れて、そのままじわり……♡ と奥に響くように圧をかけた。震えた内腿の間で、潤みきつたおまんこが、にちゅ……♡ といやらしい音を響かせる。

「里麻が僕の手になんかこんなに反応して……、お腹を触っただけでその先を期待するようないやらしくて可愛い女の子だったこと」

「あ……♡ あ……♡」

こんな状況で認めるのも悔しいけれど、私の身体は昴の手に従順に反応してしまふ。下腹部に置かれた手のひらからじわり♡ と子宮が甘く疼き出して、じいん♡ とした痺れが全身に広がっていく。

(うう……、おまんこ、きゅん♡ きゅん♡ する♡ いつもみたいに昴にイかせてほしいって、身体が求めちゃってる……っ♡)

「……っ、す、すばるう……♡」

自分のものじゃないみたいな、甘く蕩けた声を出してしまう。

(どうしてこんなことしたのって、聞かなきゃいけないのに……♡ いまはそんなの、どうでもいいくらい……♡)

「あー……、可愛い。里麻のそんな声を聞けるのは、僕だけでしょ。……その口で、僕にどうされたいのか、ちゃんとやって」

昴の親指が、私の唇をなぞる。その熱っぽいヘーゼル色の瞳を見た瞬間、彼に気持ちよくされることしか考えられなくなってしまった。

「おまんこ、切ないの……♡ イかせて……♡ イかせてほしいの……っ！
♡」

恥ずかしいおねだりに涙目になりながら、縋るように彼の手首を掴む。

そんな私に昴は満足そうに目を細めた。端正な彼の顔が近づいて、目尻に溜

「……や、あ♡ 言わないでえ……♡」

「どうして、こんなにおまんこ濡れちゃったのかな。……誰に触られて、こんなになっちゃったの？」

昂の指先が濡ればそつた割れ目をそつと押し広げると、ぐちゅ……っ♡ といやらしい音が響いた。

（あ……♡ えつちな音しちゃってる……♡ 発情してるの、わかられちゃってる……♡）

「す、すばるにい……♡」

「そうだね……、僕に、どうされたの？」

「そ、それは……♡ あ、う……♡」

昂の指は、敏感な秘豆を避けて、膣口から溢れる蜜を掬っては、いたずらにくるくると穴の周りに塗りたくる。

(それやだあ……♡　せつない……♡　ちゃんとおねがいたのに……♡　ちつともイかせてくれない……♡)

もどかしい快感に、腰が勝手にへこへこ♡　と揺れてしまう。けれど鼻は緩慢な手つきで、蜜口をくるくるとなぞるだけだ。

(今日のすばる……♡　意地悪だ……♡　誰とえっちしてるのか、わからせようとしてくる……♡)

「ほら、腰へこへこ♡　僕の指に媚びてるよ。ちゃんと saying。僕に何をされて、おまんこぐちゃぐちゃ♡　になっちゃったの……?」

「う、うう……♡」

(怒ってる……♡　どうしてかわかんないけど……♡　絶対怒ってる……♡)

おそろおそろ鼻の顔を見上げると、ヘーゼル色の瞳が熱っぽく濡れて、私を捉えていた。

「……ほら、りーま♡」

（あ♡ ……えっちのときの目だ♡ わたしに欲情してる目……っ♡）

もう、限界だった。

いたずらに触れられ続けた割れ目は、じんじん♡ と痛いぐらいの熱を持っていた。

（イかせて、ほしい……っ♡♡）

「すばるに……っ、おっぱいカリカリ♡ っていじめられて……、興奮しちゃったのお♡ イきそうだったのに、イけなくて……っ♡ 切ないのお……っ♡」

昂の口がゆつくりと弧を描いた。どろりと濁ったヘーゼル色の瞳が、優しく私を映している。

「あいつと電話しながら、僕におっぱいいじめられて気持ちよくなっちゃった

の？ 里麻はこんなにはしたくない女性だったんだね。……それとも、僕がそう
したの？」

「す、すばると……っ、たくさんえっちして……♡ きもちいいこと、たくさん
おぼえちゃったの……っ♡ えっちになっちゃったのお……っ♡」

——ぐりいっ♡

「……あぁっ♡」

親指の腹で、赤く腫れ上がったクリトリスを思いつきり押し潰されて、身体
がビクンっ♡ と跳ねた。

ぐり♡ ぐり♡ ぐり♡ ぐりぐり……っ♡

「あ、ああ……っ♡ しょれ……っ、きもちいい……っ♡ あ、ぐん……っ♡」
脳天を突き抜けるような快樂に、背中が弓なりにしなる。昂に秘部を押し付
けるようにしてしまうのがたまらなく恥ずかしいけれど、自分ではもう制御でき

なかった。

「あー……、里麻の本気喘ぎ可愛すぎる♡ 膝ガクガク♡ って震えてる♡
クリ触っただけで甘イキすごいね♡」

「お♡ お♡ しょこばっか……っ♡ ……っ♡♡」

ぬぶ……っ♡ ぬぶぶ……っ♡

(あ♡♡ ナカぶっとい指ぎたあ……♡♡)

さっきまで焦らされていたのが嘘のように、強烈な刺激を与えられて、脳裏で火花が弾ける。

「あ……っ!?♡ りょうほう……っ、らめっ♡ それ、らめえ……っ♡♡」

「僕の指で、たくさんえつちなこと覚えてたんでしょ……?♡ ナカと外からいじるのが気持ちいいこと、里麻はもう知ってるはずだよ♡ 僕の指で、たくさんアクメキメようね……♡」

「やらあ……っ、やあ……っ♡ あ、おあっ♡♡」

ぐりぐり♡ ぐりぐり♡ じゅぶじゅぶっ♡ じゅぶじゅぶっ♡

昂の指が、ナカと外の両方から私の弱点を擦りあげる。

ナカに入った中指が鍵状に曲げられて、膣の上の方にあるザラザラとしたソコを執拗に責め立てられる。

(……!!♡ お腹あっついい♡ でちゃうっ♡ ほんとにでちゃう……っ

♡)

「ず、すばる……っ!?♡ ほんとに……っ、おあっ♡ しょれ、しょれえ……っ、
やあ……っ、あっ♡」

おまんこから、愛液ではないさらさらとした液体が、ぴゅっ♡ ぴゅっ♡
と溢れ出すのがわかった。全身がガクガク♡ と痙攣し、絶頂が目の前まで
迫ってくる。

「ああ……♡　くるま……♡　よごれちゃうう……♡　♡　お、やらつ、やらあ……♡　♡　もらしたくない……♡　♡　もらしたくない……♡　♡　♡」

「そんなこと気にしなくていいから。このまま吹いて……、行って♡」

（むり……♡　♡　むりい……♡　♡　こんなっ、高い車で……♡　♡　あ、あ♡　くるっ♡　くるっ♡♡）

強烈な絶頂の予感を前に、私は力の入らない手で縋り付くように彼の腕を掴んだ。けれど、彼の手は止まることなく、そのまま私を絶頂へと押し上げる。

「あー……♡　ナカ締め付けすぎ……♡　指持つてかれそ……♡」

（きちやう……♡　♡　きちやう……♡　♡　やだやだっ、出したくない……♡　♡　♡　イク、イクイク……♡　♡♡）

「あ、すばるう……♡　♡　ああっ♡　イク、いつちゃう……♡　♡　イクイク……♡　♡

♡♡
」

ガクっ♡ ガクガクっ♡♡

ぷしやああああああつ♡ ぴゅくく……っ♡ ぴゅっ♡

「お、ああ……♡」

身体が一際大きく痙攣する。熱い潮をたくさん吹き出して、私はいつてしまつた……♡

(あー……♡♡ やっちゃつた……♡♡)

溢れ出した潮が、ストッキングやスカートに染みていく。染みはじわじわと広がって、やがて高級な漆黒のレザーのシートをぐっしより♡ と濡らしてく。

「す、すばる……っ、ごめ……っ♡ ……くっっ!!♡♡」

ぐちよぐちよぐちよっ♡ びちやびちやびちやっ♡

いつている最中の膣を、容赦なくかき混ぜられる。彼の中指が的確にGス
ポットを刺激し続けて、潮がぴゅっ♡　ぴゅっ♡　と溢れ続ける。

「あー……、可愛い♡　ずーっとお漏らししちゃってる……♡　気持ちよくて
戻ってこれないね……♡」

「お♡　あ……っ♡　らめっ、らめえ……っ、ほんとに……♡　むりっ、む
りい……っ　ああっ♡」

（ほんとに……っ、ダメなやつ……!!♡　いつてる……っ♡　ずっといつて
るう……っ♡　いくのおわれないっ♡♡）

全身の痙攣が止まらない。足はだらしなくガニ股になって、股の間から
ぴゅっ♡　ぴゅっ♡　と潮を溢れさせることしかできなかった。

「りま……♡」

「んん……♡」

運転席にいた昴が身を乗り出して、ほとんど私に覆い被さるようにして、唇を重ねてきた。唇が、熱い。

すぐに分厚い男の舌がぬるり♡ と入り込んで、私の口内を蹂躪する。上顎の奥の方まで舌をねじ込まれて、息が苦しい。だけどそれすらも甘い痺れとなつて、脳の芯が快感で震えた。

「んん……っ♡ ん、ちゅ……っ、あ、は……っ♡ ああっ、ん、んむ……っ♡ ん♡ あ〜♡ ……っ♡」

ぎゅむううっ♡ ぐいっ♡ ぐいっ♡

昴の手が、真っ赤に膨れた乳首をつねり上げた。身体の全部が昴に支配されてしまつて、もうどうすることもできなかつた。

(ぜんぶきもちよくされちゃつて……っ♡ もうどこがきもちいいのかわからないよお……っ♡♡)

身体はガク♡ ガク♡ と震えっぱなしで、脳の裏側では絶えず火花が散っている。伊っているはずなのに、それよりもさらに大きな絶頂の予感が迫り来る。

じゅるっ♡ じゅるるっ♡ ちゅぱっ♡ ちゅぱっ♡

くりくりくりっ♡ くりくりくりっ♡

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡ ぐちゅぐちゅっ♡

「お……っ♡♡ ああっ、やらあ……っ♡♡ くるっ、くるうっ……っ♡♡

「あー……、里麻のおまんこすっごい……♡♡ 僕の指に絡みついてくる♡ ますますごいアクメきちやうね……♡♡」